京都（↓Web）「ヲシテ講習会」　１１０回目　令和７年２月１６日（日曜日）　池田 満

『ホツマツタヱ』の1アヤは、キツ（東西）の名のアヤです。『ミカサフミ』もキツ（東西）の名のアヤが1アヤ目に据えられてあります。キツの名のアヤは天地からの恵みを説くアヤなのです。イサナギ・イサナミさまの時代に編まれたアヤで、とても古い時代の文章です。『ホツマツタヱ』は、ホムシ去るアヤが合体されています。いつの時代に結合させたのでしょうか。（オオタタネコさん、４０アヤに収納するためか？　クシミカタマさん、前編の編集時。『ミカサフミ』は、コヤネさんが1アヤの前文を添えています）

1アヤの一番初めの話が、アマテルカミの姉が捨て子にされた話です。読者をして、息をもつかせぬ衝撃的な構成です。この話を真正面から受け入れたらば、古事記的な「神さま、神さまの世界観」から抜け出ることが出来ますでしょう。そう、わが国の歴史は、実在のアマカミ（古代の天皇陛下）の紡いでこられたものだったのです。

「直訳偽書の秀真伝（しゅうしんでん）」にも、色々なタイプがあります。

鏑さんタイプ、千葉さんタイプ、鳥居礼タイプなどの、ヲシテの原文の文章がスラスラ読めない部類。明白な「直訳偽書の秀真伝（しゅうしんでん）」です。

皿井さんタイプの場合は、少々複雑です。ヲシテを読めても古事記教の呪縛から抜け出せない部類。（安聡本発見にも「校本三書比較」の上梓にも無視。「記紀原書」の把握が希薄）

ヲシテの原文（**白文の小笠原長弘本オンリー**）はスラスラ読めても、神様神様の拝み教の位置なのです。拝む対象を求めているだけなのです。理解ベースを『古事記』から1アヤにチェンジすれば、拝み教からの卒業ができます。今村さんタイプも、宮崎さんなどの類いの「アワウタ教」もこれに近いです。半世紀見てきました。アスナロでもないです。この部類も「直訳偽書の秀真伝（しゅうしんでん）」に分類します。1アヤの最重要点が、拝み教からの脱却です。

『ホツマツタヱ』1アヤ　キツのナと　ホムシさる　アヤ

みつるナビ
ミ　『ホツマツタヱ』でも『ミカサフミ』でも、1アヤには構造的な枢要の理解を求める重要な役割が込められています。天地自然からのメクミ（恵み）を提示して、大宇宙と我々ヒトとのありようを諭しているのです。

31音のウタを特にワカと呼ぶ言葉には深い意味合いが込められています。単に若返るからワカというだけではありませんでした。長い物語がベースにあります。

ワカの名前が付けられたのは、ワカヒメさんのお名前にも由来していました。ワカヒメさんは、アマテルカミの実の姉なのでしたが、両親が「アメのフシ（後の厄年）」に当たったために捨て子にされました。（『ミカサフミ』に詳しい）

ワカヒメは捨て子にされて、カナサキのヲキナの拾い子として、ヒロタのミヤ及びニシトノに育てます。ヒロタは、現在の兵庫県西宮市大社町の広田神社に所縁を伺えます。また、当時には海水面が今より数メートル高くて、西宮市の武庫川扇状地の大部分が海でした。大きな入江になっていて入江の入り口にニシトノも建てられました。此処は、中世には摂社の浜の南の宮とされていたのです。現在の西宮神社（兵庫県西宮市社家町）です。

ヒロタに育てられるワカヒメさんは、カナサキの妻（ヱシナツ）の愛(いっく)しみを受ける事に成りました。ヱシナツさんは早世の子供に心を痛めていたので、ワカヒメに注ぐ愛情が大きかったのでした。アワウワとあやす愛情です。手を打ってシホの目（パチパチ、ばー）です。

その養育は、伝統に沿っておこなわれました。ウマレヒ（誕生日）にはカシミケです。炊(かし)いだミケ（穀物）の食べ初めをします。歩き初めのタチマヒもします。

３歳のフユ（冬）の至りの日（１１月モチ。満月。大体１５日）には、髪の毛の結い上げをおこないます、カミオキです。（平安時代の頃とはちょっと違うかも?）　これよりは、年中行事にも参加をします。縄文哲学の基本の行事です。

ハツヒ（元旦）は、アワ（天地自然）へのウヤマヒ（感謝と敬愛）をおこないます。

３月３日は、モモにヒナの祭りです。ハル（春）の終わりの季節の到来を祝います。

５月５日は、アヤメにチマキの祭りです。さみたれ（梅雨）の、ナツ（夏）の盛りの到来を祝います。

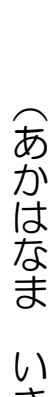
７月７日は、タナハタの祭りです。アキ（秋）の到来を祝います。

９月９日は、キククリの祝いです。アキ（秋）の盛り到来です。

５歳のフユ（冬）の至りの１１月モチ（旧暦１５日）には、言葉の習い始めをします。（後の七五三）　正装をしての行事です。ヲ（男の子）はハカマを着用します。メ（女の子）はカツキ（被り着）です。

コトハ（言葉）を直すアワウタを常に教えてゆきます。

（あかはなま　いきひにみうく）


（ふぬむえけ　へねめおこほの）

（もとろそよ　をてれせゑ(ye)つる）

（すゆんちり　しゐ(yi)たらさやわ）

アワのウタを、音曲に合わせて歌います。カタ（打楽器）を掻き打ち、コト（琴）を弾き奏です。そうしますと、自ずからにコヱ（声）も明らかになってきます。

ヰ・クラ、ム・ワタ、ヲ（人体の構成の基本、心と身体の元、五臓六腑とは成り立ちが違います）もネ・コヱの構成から分けて明らかになります。アのアワウタの２４（フソヨ）に通って、ワのアワウタも合わせて全体に４８（ヨソヤ）に完全になります。この為、ミ（身体）の内部からの巡りが良くなり、ヤマヒ（病）も起きなくなります。それで、長寿の達成がなされてゆきます。

スミヱのヲキナ（カナサキさん）は此の原理をちゃんとご存知でした。

ワカヒメは、サトク（聡明）して、カナサキにキツサネ（東西南北）の名の謂(ゆ)えを問いますのでした。カナサキのヲキナは答えて教えます。

『ヒ（日）の出(い)ずるカシラ（始め）だから、ヒ・カシと言います。

長(た)け昇る方角は、ミ（身体）にナミを波々と齎すので、ミ・ナミです。

ヒ（日）の落ちゆく時は、ニ（真っ赤）に燃え尽き（シハ、為し終わる）て沈みますから、ニシです。

ヨネ（米）とミツ（水）をカマ（窯・竈）に炊ぐ際にも、方角の言葉の意味はあると言えます。

初めにヒ（火）を点(つ)けて熾(おこ)します。ヒ・カシラですね。ヒ・カシです。

煮えてくると、ハナ（派手）に煮立って、ミ（ヨネの実）にナミ（為しむる・生じさせる）が入ってきます。

ニ（柔らかくなる）を得て、シ（為す）がツム（集まる。積む）ので、食べやすくなります。

アマテルカミはご長寿を実現するために、少食（糖質制限）を実践なさって居られます。ヱカ【詳細は未詳】に一度のミケはこれです。

昔からの食物を寿命の関連のことを考えてみます。大昔には月に二度のミケでした。それが、月に三度ミケを食するようになる頃までのヒトの寿命はモヨロ（１００万年）でした。月に六度ミケを食する時代になったらヒトの寿命はフソヨロ（２０万年）でした。さらに時代が降って、今の世になりましたらたったのフヨロ（2万年）年だけ生き長らえるだけです。この歴史を考えますと、ミケが重なるほどにヨワイ（寿命）は短くなるようです。此の故に、ヲンカミ（アマテルカミ）は月に一度のミケに止(とど)めて居られます。また、苦いハホナ（チョミクサ）を常食もされておいでです。

ミヤの建築について考えてみましょう。方角の意味があります。

ミ・ナミ（南）に向きて建てられるのは、最も良いナミの享受を得るためです。ア・サキ（天空からの及ぼされるキ（エネルギー））を充分に得て長生きを実現できます。ミヤの後ろをキタと言う言葉の意味は、夜には寝るからキタはネと言います。例えて言えば、若しもヒト（他人）が訪ねて来たとしましょう。そして来意を告げましても、それが、どうであるかですね。会うべき意義のない場合は、会うべきではありません。その場合は、キタ（来た）だけの事です。しかし、会うことになったら、日の出と同じになります。ヒ・カシラのヒ・カシです。会って話を進めますと、ミにナミを受けて事が弁(わきま)えられます。話が落ち着くのはニシです。赤く煮え定まるニ・シです。そして、キタに帰ってゆきます。ネより来たりて、ネに帰ります。此処にも、方角の順番の意味が備わっています。

またさらに、天地自然の季節の移り変わりにも、方角の意義は備わっています。

木はハル（春）には若葉で彩られます。ナツ（夏）は青葉です。アキ（秋）は二ア（赤く燃えた）モミチ（紅葉）です。フユ（冬）は落ち葉になります。此処にも同じ

意味が含まれています。ネ（根っ子、根底）はキタに充実が図られます。キ・サス（兆し）のヒ・カシの若葉です。サのサカ卍（栄え）の青葉です。ツのニ・シ（赤く為す）ツクル（尽きる）の紅葉になる循環です。

さらに世の中の仕組みにも方角の意味が関連しています。

ヲ（ヲ・中央）とは、キミ（キとミ、東と西、ヲカミとメカミ）がクニをヲサム（教え導く）事から、キツヲサネの中央に位置しているのです。つまり、キツサネ（東西南北）と、ヲ（ヲ・中央）は、ヨモ（四方）とナカ（中央）の関係とも言えます。

また、男女の区別にも関連しています。

キ（ヲカミ）はヒ・カシ（ヒ・カシラ、兆し）です。ハナ（花）もハ（葉）もミ・ナミ（身体にナミ）です。木(こ)の実(み)はニ・シ（煮(に)えて為(し)尽くす）です。ミ（実）を別けてオフル（生じる）キ（ヲカミ）のミ（メカミ）でありますので、キミはヲ・メカミと言う訳です。カミとは、ⓘ卍（カミ）でして、繋がり齎し・生じさせるの意味です』

東西南北をキツサネという意味には、何重にも意味合いが重なっているのです。

みつるナビ

ⓜ これ程大切な言葉が、漢字国字化時代になって亡失されたのは、不思議です。ただ1例、『万葉集』に残されていた用例は白眉と言うべきでしょう。3327番の三野の大王の挽歌です。『万葉集注解』澤瀉久孝（池田 満読み）

3327

百小竹之 三野王 ももしのの みののおおきみ
金厩 立而飼駒 きのむまや たててかふコマ
角厩 立而飼駒 つのむまや たててかふコマ
草社者 取而飼矣 くさこそは とりてかふなり
水社者 挹而飼矣 みつこそは くみてかふなり
何然 大分青馬之 なにしかも あしげのむまの
鳴立鶴 いばえたちつる
（天）

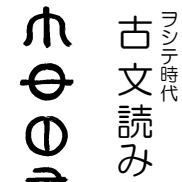
さてさて、ウタの事につきまして、ワカと名付けられた謂(い)われを説明しましょう。

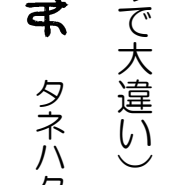
今の御代のことです。（8代アマカミのアマテルカミの時代）イサワのミヤにワカヒメが侍(はべ)って

いた時に、キシヰ（和歌山）のイナダ（稲田）がホヲムシ（イナゴ）に害された事がありました。キシヰの人は窮状をイサワのヲヲンカミ（アマテルカミ）に訴えに来ました。折しもその時、アマテルカミはアマのマナヰ（祖父のトヨケカミのご陵）にミユキ（御幸）なさった後でご不在でした。イサワに遷都の後にも、マナヰにミユキをなさっていたのです。トヨケカミをお慕いなさって居られたのですね。

アマテルカミのご不在を強く嘆くキシヰの人々でした。そこで、正皇后のムカツヒメは代理としてキシヰに急ぎ行啓されました。ワカヒメも同行なさったのでしょうか。キシヰ（和歌山）の田のキ（東）に立たれてオシクサ（ホ**9**-４２、**31**-５３、**32**-３９にはヲに作る。教えの元のウタ）を扇ぐワカヒメでした。つまりワカヒメはウタをお詠みになりまして、ウタを以って扇ぎ払うと、ムシは去って行きますのでした。そこで、ムカツヒメはこのウタを以って大々的に虫払いをしようと、企画なさいました。３０人の女性を左右に佇(たたず)ませてそれぞれ各々も共に歌わしめます。イナムシ（稲虫）を払うワカのマシナイ（生じさせる・為す・成る・心を尽くす）です。（俗文読みの「種は種」と、古文読みで大違い）

タネハタね　ウムスキサカメ


マメスメラノソロハモハメソ


ムシモミなしむ

「た（治世）」の根底（ネ）をハタル（強引に貪る）事はしないで下さい。生むス（為す）、「キ（東）」は栄える「メ（目・要・芽）」です。「マ」の「メ（目・要）」を、ス（為す）「メラノ（なさしめられる）、ソロ（水田の作物、畑の作物）のハ（葉）もハメソ（食べるな！）。ムシ（害虫）よ、あなたもミ（稲の実、いねもみ）を成さし

める為に心を使いなさいよ」

繰り返し３６０回朗唱しましたら、ムシはサラリとニシ（西）のウミ（海）に飛び去っていきました。ヱ（災い）を此処に払うことが出来ました。ワカヒメの試みの通りに、イネは若やぎを取り戻しました。イネは蘇ったのです。ヌハタマの真っ暗の希望のない時から、一転して明るく、**田****米**（ソロ）に実って世の糧を得たのでした。尊き恵みです、タカラです。

キシヰの国民は感謝を表すためにアヒミヤの前に新建築しました。アヒのマヱミヤです。（日前国懸神宮、和歌山市秋月）　ムカツヒメへの感謝の現れです。さらに、西の海辺の景勝地にタマツミヤを建てました。（現在の、玉津島神社、和歌山市和歌浦中）ワカヒメへの感謝を表すためです。ワカヒメさんは、お気に召されました。タマツミヤにご逗留なさいます。とても素晴らしい景勝の地です。

また、元々のアヒミヤをクニカケのミヤとして呼ぶようになります。本来の人々を守るべきの元々のアヒミヤはあんまり役に立たなかったからでした。それで、クニカケです。クニカケのミヤ（元のアヒミヤ）の前にアヒのマエミヤが建てられて、ムカツヒメへの感謝が表されたわけです。

・

さて、タマツのミヤにワカヒメが逗留していますうちに、兄のアマテルカミから使者が使わされて来ました。

使者はアチヒコと言う人物です。アチヒコは、コヨミを新たに作成し直した、天文学や数学にも明るい立派なヒトでした。さらに、イサワのミヤの造営を成し遂げたのでした。建築にも通じた、本当に仕事の出来る人でした。余りにも忙しかったアチヒ

コさんでした。また、ワカヒメさんも結構な多忙の内に暮らしていました。その二人が、タマツミヤで安寧の一時(ひととき)を得ましたのでした。ワカヒメはウタを詠んでかねてからの思いを伝えました。

きしいこそ　つまおみきわに

ことのねの　とこにわきみお

まつそこゐしき

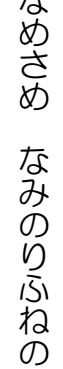
「キシイこそ　ツマ（妻）お(を)　みきわ（身際）に　コト（琴）のネ（音）の　トコ（所）にワキミお(を)　まつそ（待つぞ）こいしき（こゐ、恋しき）」

アチヒコは返歌をすぐに返せませんでした。ミヤコのイサワ（志摩市　伊雑）の宮中に戻ります。どう返答していいものか？　アチヒコは、イサワに滞在する人々に聞いてみるのでした。カナサキさんは言います。

『このウタは、拒否の出来ない、マワリウタです。それは拒否の出来ない、完結の完璧なウタだからです。

むかし、わたくしも、キミ（アマテルカミのミユキか？）のお供で、船に乗っていた時のことでした。風が激しくて大波が立っていました。この分では、港に無事に着くことが出来るかどうか？　危ういところです。そこで、ウタを詠みました。マワリウタです。（⊕⊖通当だけは⊕ゆ、ナカの清音が元々）

なかきよの　とおのねふりの



みなめさめ　なみのりふねの

おとのよきかな

（「なかきよの」の「なか」の意味が「長い」を指すならば、「なが」になります。

それなら末尾の「かな」も「がな」ですね。末尾の「かな」の「か」は全写本とも清音の「か」で記されています。　**伝統的な俗語読みの「長き夜」の記憶に引っ張られるのですね**

（『全浙兵制考』侯継高の「日本風土記」に最古の翻訳文があった、辻公則さんの発見。16世紀末ごろ、浙江省杭州の防衛の論）

「なかきよの」の清音で意味を考えますと、意味合いが深いです。

「なかきよ（大宇宙の中心・来る恵みの・良きこと）」の「とお（「トのヲシヱ」の定まり）」を、中々に良き世の来ることを「ト」のヲシテの理念の普及で「ネ（根底）」からの「フリ（振興）」を図れます、皆（国民すべて）が目覚める事です、波乗りフネ（船）の音も良き事ですね）

「なかきよの」のマワリウタを詠みまして歌いますと、程もなく、風は止(や)み、フネは快く進むことが出来、無事にアワ（四国の阿波か?）に着きました。

マワリウタには、強い力が備わっているのだと思います。

ワカヒメのウタも、マワリウタです。否定する事は難しいのではありませんか?

ワカヒメのミヤヒの心を拒否することもないのではありませんか?　』

ワカヒメさんの育ての親でもあるカナサキさんの勧めでした。さらに、アマテルカミも、薦めておっしゃいます。

『カナサキのフネノリを受けて、メヲ（夫婦）となるのがよろしいでしょう』

そうして、アチヒコとワカヒメは結ばれまして、ワカヒメはヤスカワのシタテルヒメの称号を得ました。

ラブレターのウタで結ばれたアチヒコには、オモイカネのニックネームが付きました。思い兼ねてのアチヒコさんでして、皆がみんなオモイカネと呼ぶのでした。ヤスカワの辺(ほと)りにオモイカネとシタテルヒメのミヤを設けます。今の滋賀県野洲

市には比留田の地名もあり、比利田神社も『延喜式』に記載されています。（洪水や地震のために旧宮跡の詳細は不明。比利田神社も『延喜式』の「神名帳」に記載の後も、何回も再建されているようです。野洲川は氾濫した歴史が多いです）

シタテルヒメのオシクサ（ホ**9**-４２、**31**-５３、**32**-３９にはヲに作る。教えの元のウタ）は、熊野の那智大社の扇祭り（火祭り）に伝承が残されています。

ヌハタマのミ（実）を成らせるヒアフギ（カラスアフキ、アヤメの一種）に例えたりしてます。真っ黒のヌハタマの実は、夜の例えです。それが、盛夏のミナツキ（旧暦6月。太陽暦では7月に入ってから）には真っ赤な花が咲きます。ホノホ（炎）のようなハナです。カラスのような真っ黒な実をハ（生じさせる）のは、赤き明るい日の出のハナでした。ヒ・アフギ（ヒオウギのアヤメ）の平らな形を扇に象(かたど)って、国家経営の基礎を教えるヲしゑくさ（ヲシヱクサ）を作りました。１２体のそれぞれに、３２扇を取り付けて、下部にはヒアフギのアヤメを４株付けます。カラス・アフギの１２体です。３２は、３６５日の１２分の１の３０．４日を切り上げて３１日として、さらに魔物の入り込む隙を詰め込んで溢れさせるために、余分の１日を足した３２の数字です。ヒアフギの４株は、１２体の全部を足しますと４８の言葉の音韻の数に相当します。４８は天地自然の根拠を表しています。

母イサナミさんの亡き後、ハナキネ（後のソサノヲ）は、姉のワカヒメさんの許で教育を受けていました。

そこで、若いハナキネは５・７音の綴り方の謂(い)われを質問しました。

ワカヒメの答えは次のようでした。

『５・７音に綴(つづ)るのは、アワのフシだからです。つまり寒い時期の５ヶ月のネの季節と、温かな７ヶ月の満ち満ちた季節を表現しているのが、天地自然の恵みの

内に暮らすヒトとしての基本の備わりだからです』

また、さらに若いハナキネは、ハラヒ(魔物の払い)の32音の意味を質問します。姉で母親代わりのワカヒメさんは教えて答えます。

『ハラヒのウタはミソフ（32）なのです。何故ならば、基本の31に1日を足したものなのです。31日は、一年の365日を12ヶ月で割った30．4を、切り上げて纏めた数字です。これが基本の日のめぐりです。

しかし、ツキ（月）の巡りは30日にも足りません。ツキは重くて巡りが遅くなるためです。それで隙間が生じます。隙間に入り込んで悪さをするマモノの暗躍。

日の巡りからしましたら、31日をひと月と考えるのが妥当なところです。31日に後先半日ずつヒ（日）を足して32日にしたら、隙間なくピシっと嵌(はま)り込んで魔物の入る隙が無くなります。アルマ（隙間が有る）を伺うのがヲヱモノです、魔物ですね。このヲヱモノを払う力のあるのが31音に声（音韻）の1音余らせての32音のウタなのです。

ヒトとはシキシマ（為す来る締り）の会う所に生まれてくるものです。微妙な偶然の合わさりの所とも言えますでしょうか。天地自然の巡りのヒ（日）とツキ（月）の循環の31日がそもそもにカス（付加する来る為す）リズムです。メ（生じさせる）の時は、ミソフなのです。ヲヱモノを防ぐことが出来ます。それで32の字余らせウタはヲヱモノ（魔物）払いの効力があるのです。ウタのカス（来る為す）の力はワ（地球上のあらゆる物)に応(こた)えるものなのです。此の故にシキシマ（為す来る締り）に因って為す田（の）のワカのミチなのです』